

## 曹洞宗総合研究センター第13回学術大会特別部会

### 東日本大震災をうけて、いま私たちに何ができるのかを考えるシンポジウム 開催報告②

平成23年10月24日 午前10時～ 於 曹洞宗檀信徒会館3階 桜の間

#### 第1部「被災者と共に歩む～東日本大震災の支援活動に学ぶ」

##### リレー発表「僧侶の支援活動から学ぶ、被災地支援の実際と課題」

発表者① 宮下俊哉師（全国曹洞宗青年会災害復興支援部アドバイザー）

#### はじめに

全国曹洞宗青年会の活動に際しまして、多くの方のご参加とご協力をいただき、支援活動をさせていただいておりますことに感謝を申し上げます。

東日本大震災に際しては、発生後10月5日まで、全曹青がコーディネートしたり、報告を受けたりして把握している範囲では、各曹青、宗侶有志、一般合わせて、48団体、延べ1600人余りの方がたが活動されています。活動内容は、物資支援、行茶活動、泥出しや瓦礫撤去、引っ越しの手伝いと言った一般ボランティア活動、読経供養、原発事故による避難者（子ども）のサマーキャンプなど多彩な内容になっております。

私たちは、宗教者としての立場は、「心の中」に認識しながら、現地の方がたに自分たちの活動を押し付けない相手に寄り添った活動と、ニーズに即した活動を目指してきました。主体は被災された方であり、支援者は自立への助力や、共助の社会への手助けの為の黒子となるよう心がけてきております。また、この支援活動の中にも、長野県北部地震、台風12号、15号による水害もあり、こちらにも青年宗侶が支援活動に赴いております。

さまざまな課題に試行錯誤しながらの活動ですが、これからも、ともに生きる人間として、人びとに寄り添いともに学んでいくところです。

#### 1、復興支援活動について

##### (1)これまでの経緯

経緯といたしましては、前期、18期全国曹洞宗青年会は、組織改変をいたしました。これまでのボランティア活動は、ボランティア委員会が担当し、これまでに能登半島沖地震、新潟県中越沖地震などにおいて、諸先輩方が努力されボランティア活動を行い、成果と評価をいただけてきました。

しかしながら、全曹青内において、ボランティア委員会のみがボランティア活動という風潮が生まれたことも否定できません。私たち僧侶の日常の活動が、菩薩行であり、すべての行動がボランティアに通じるものがあるのではないかという想いにより、18期はボ

ランティア委員会を廃止し、「いのちの声に耳を澄ます」をスローガンに、人びとに寄り添う活動を目指し、電話相談事業・研修などを展開してまいりました。

同時に災害時への対応といたしまして、特別委員会を設置し整備を進めました。そして、災害復興支援部を設置することの検討を行いながら、平時において、ボランティアセンターの体験研修を行うとともに、非常時に情報発信として活用するWEBページを設置し備えてまいりました。

## (2)情報～発信と提供

3月11日、この曹洞宗檀信徒会館において会議中、私は震災にあうことになりました。即日、全曹青は災害復興支援部を立ち上げまして、災害に関する特別委員会災害専用メーリングリストおよび専用ブログを利用し情報の収集と発信をさせていただいてまいりました。専用メーリングリストでは、関係者間で個人情報を含む情報交換と収集および共有を図りました。専用WEBページは、広く一般まで閲覧が可能であり、時系列で最新情報を見ることができます。また、これまで、ボランティア情報をはじめとした情報提供と活動報告を掲載しています。

WEBページには、全曹青の活動のみならず、さまざまな活動をされている青年僧侶の方がたの報告も合わせて掲載されています。復興支援活動をしている皆さまの情報共有を図るとともに、これから支援活動を行いたいと考えている方がたの活動の参考にさせていただくことを目指しております。

## (3)救援物資援助

次の援助といたしまして、物資援助をさせていただきました。当初、全曹青としては物資援助を検討しておりませんでした。しかし、甚大かつ広範囲におよぶ被害によって、公的支援が追いつかず、困窮しているという現地よりの要請を受けまして、ガソリン、生活用品などの物資援助を、福島、宮城、岩手にむけて行わせていただきました。さまざまな団体から物資をご提供いただきまして、それぞれ現地にお届けすることができました。

物資援助に際しましては、現地の曹青会員はじめ、多くの周囲の方がたもガソリンが大変困窮する中で、市役所に回ったり避難所に回ったりしながら、現地が必要とされているところを手配した上で、援助を行うことができました。この物資援助にはタイムラグに伴うミスマッチが生じやすいところから、現状といたしまして、SVA（シャンティ国際ボランティア会）と相談しながら、これから必要になるであろう、高圧洗浄機や水害対応の道具や炊き出しセットなどを呼びかけまして、提供させていただきました。

活動を継続していく中での支援といたしましては、仮設住宅の談話室などに整備の無かった道具を、現地の行政や社協、仮設住宅を運営管理する業者さんなどと相談の上、物資提供を呼びかけ、仮設住宅の談話室などに椅子やお茶道具などを送っていただいております。特に秋田曹青でチャリティTシャツを販売していましたが、その収益で釜石市の仮

設住宅の談話室にお茶道具をご寄付いただき、行茶活動や住民の皆さまの寄り合いなどの活動に活用させていただいております。

#### (4) 現地拠点の設置

全曹青では福島県伊達市の成林寺さま境内に災害復興支援部現地拠点を置かせていただきました。全曹青はコーディネートという立場でありまして、各曹青会や活動される方が主体です。また、拠点地、拠点を置くことには、より現地に即した活動に結びつけることができるという利点があります。福島県伊達市の拠点におきましてコーディネートさせていただく中で、福島県、宮城県、岩手県の活動を調整させていただいております。現在3人の事務局員の方にお手伝いをいただいております。

#### (5) 生活支援、傾聴活動

生活支援活動といたしまして、避難所での行茶傾聴活動をはじめ、炊き出し、ボランティアセンターなどでの泥出し、瓦礫撤去などの活動を行っております。

この行茶活動とは、人の手で心を込めて入れたお茶やコーヒーなど飲み物やお菓子で、身心を癒していただきながら、相手の声に耳を傾け、一緒にお話をする活動です。お話をする中で、支援者が気付いたことや、困りごとなどを、社協や行政や関係機関に届けます。これは、調査などでは気がつかない住民の声を、支援や解決に反映することができると同時に、(被災)住民のエンパワメントにもつながることから、社協や行政からも要請と期待がされております。

仮設住宅におきましても、談話室、集会所において、行茶活動を展開しております。仮設住宅におけるサロン活動は、現地行政や社協などが、保健師、生活支援相談員の方がたと連携を図って運営されています。全曹青は行政や社協と連携し、傾聴活動をコーディネートしておりますが、傾聴活動という側面だけでなく、コミュニティ支援、自死予防、介護予防、子ども支援などの複合的な支援を含んだ活動になっており、住民全体の自立支援の活動をさせていただいております。

次に「虹の架け橋プロジェクト」を実施させていただきました。お菓子や文具などの、小さなプレゼントにメッセージを添えましてお届けさせていただきました。ただこれを届けるというのではなく、発信する側、地元の学校や支援をしたいという方、子どもたちに呼びかけまして、現地の子どもたちに届けるというプロジェクトです。

長野県の2校、北海道の1校、兵庫県のお寺を中心に集まった子どもたちからのプレゼントを、宮城県山元町の学校と保育園幼稚園、岩手県釜石市の自立支援学校へ届けました。長野県上田市の中学では、宮城県山元町の幼稚園に、プレゼントを届けさせていただきましたが、幼稚園の保護者からもお礼状が届き、幼稚園から逆に朝顔の種が届けられ、それを中学生がまた育て、花が咲いた様子を写真にして送るなど交流が始まっております。

「虹の架け橋第2プロジェクト」といたしまして、「文通プロジェクト」を行なっております。

ます。送り側が不特定多数の方のためにメッセージや絵手紙を作成し、仮設住宅談話室などに置きます。そして、それを見た現地住民の方が、任意で返信を書いていただくと、文通が始まるというプロジェクトです。仮設住宅に移行してから、お茶のみサロンにも行きにくいという方に、孤独を防止する、また、誰かとつながっているという安心感を持っていただけるのではないかという考えから生まれたプロジェクトです。現在、宮城県、福島の仮設住宅に配布させていただいております。

## (6) 岩手の活動

次に岩手県での活動に触れさせていただきます。全国社会福祉協議会、共同募金会、NPOや企業などの協働会議体で、災害時に支援活動等を行う、「災害ボランティア活動支援プロジェクト会議」があります。この派遣で岩手県釜石市の社会福祉協議会が設置するボランティアセンターの運営支援に入りました。この派遣では茨城県高雲寺・米澤智秀師も福島県いわき市へ派遣されております。

岩手県での支援では、釜石市社会福祉協議会ならびにボランティアセンターの運営コーディネイト支援にあたりると同時に、必要とされる支援について全曹青を通じて、各曹青会などに、釜石でのボランティア活動を紹介させていただきました。釜石では「行茶活動」をお茶っこサロンという名称でスタートし、岩手曹青、山口曹青はじめ各曹青、岩手県立大学、キリスト系団体などが、仮設住宅談話室において、サロン活動を展開しています。

岩手県立大学では、大学生のアイデアで仮設住宅の談話室に掲示板を作りました。行政や社協では個人情報を出すことができませんが、自分で自分についての情報発信をすることで、個人情報を気にすることなく、情報の掲示が可能になり、お互いに交流が始まるきっかけが生まれました。

山口曹青は、シャンティ山口、山口県宗務所と協働した活動になっておりまして、5月から現在に至るまで、仮設住宅における行茶活動チャットセラピー（おしゃべりを通してこころを癒す活動）にご協力いただいております。長期間にわたりまして活動していただいております、仮設住宅に行き僧侶といえ、**「山口の？」**と聞かれるくらい、地域に知られ、親しまれています。

## 2、活動の中で学んだことなど

### (1) 行政も、社協も被災者である～住民のエンパワメントを

活動の中で学んだことですが、行政や社協の方がたも、同じ現地の方で被災者だということ。活動コーディネイトのために、発災より、行政、社協、現地の関係機関の方とお会いし、話をしてきました。支援の話が一段落すると、自分の身の上の話などを、涙しながら話す職員に多く出会いました。中には2時間以上も話をする方もおりました。ある職員は、自分の家族の行方がわからないまま、避難所から職場に向かい、避難者の対応に追われる日々だったそうです。

行政や社協の対応に批判的な方もおります。批判して距離を置くことは簡単ですが、支援活動というのは、個人個人の要望を満たすために、自分のやりたいことや考えを押し付けるのではなく、相手のために何をするのかを考えることからスタートすることが重要だと考えました。その地域の方がたが、支え合い、地域の問題を自分たちが発見し、自分たちも解決の道を探ることができるように、そして、自分たちが出来ないときに、そっとサポートするのが、支援者なのではないかと感じました。

## (2)被災者、被災地の呼び方って？

「被災者」というのは、支援者からの目線と自分たちのおかれた環境により、微妙に差を生む言葉であり、あえて言えば、「被災地」という地名はどこにもありません。「被災地」という言葉についても、同じ市域で津波の被害を受けた地区と、そうでない地区の微妙な感情の差を生んでいます。住宅街の仮設住宅についても、仮設住宅には支援が入るが、その外は支援を受けないなどの差が生まれています。「被災者」、「被災地」という区分けでなく、同じ人としての目線も大切であると感じました。

## (3)問題やニーズはもしかしたら地域のもとからの課題

支援に関しての地域の課題をみると、震災前にも課題となっていた問題が少なからずあることに気がきます。人口動態、雇用、地域コミュニティ、福祉などの問題が、震災にて露呈もしくは強く浮き上がってきた地域もあります。このような地域は、他地域からの支援者が引いてしまうと、その後は立ち行かなくなる場合があります。その面からも、ただ、問題があるからそれを支援というのではなく、十分に地元が本当にこれから良くなっていくように考えながら、どのようにサポートすべきか考えることが必要と感じました。

## 3、活動上の問題点

### (1)物資支援の難しさ

活動の問題点についてですが、第1には、物資支援の難しさです。本来、物資の支援は視野に入れていませんでしたが、現地からの要請により物資支援を行いました。支援物資は、現地からの要望を受けて手配をいたしますが、調達し現地に届けるまでに数日は要し、状況が変化し、ミスマッチが生じることもありました。そのため、現地での調整には労力を要しました。

### (2)広域災害の支援のコーディネートの難しさ

問題点の第2は、広域災害の支援のコーディネートの難しさです。災害復興支援部を福島県伊達市に置くことで、福島県、宮城県のコーディネートができましたが、岩手県は距離的にも難しい位置にあります。資金的にも人員的にも岩手県に新たな拠点をすることは難しかったのですが、私が岩手県釜石市に派遣されたことを利用して、この面をカバーし

ました。しかし、岩手県全域までには支援が至っていません。

### (3) 継続支援の難しさ

問題点の第3は、継続支援の難しさです。「行茶活動」などは、継続した支援が望ましいのですが、どのように活動を続けていくかという点が悩みです。いずれ地元を主体に移行し、さまざまな団体が関連し合うことが大切だと考えています。岩手県釜石市においては、地元呼びかけを行いました。キリスト教系の方がたに関心を寄せていただき、活動していただいています。キリスト教系では、ベースキャンプを設け、現地で勉強会を開くなど、積極的にボランティアの質を高める努力をすることによって、継続した活動となっています。

### (4) 行茶活動だけでは飽きがる

問題点の第4は、行茶活動だけでは飽きがるということです。行茶活動を継続していると、来る人が固定されてきます。現地では「ただお茶のみでは集まらない」「男性が参加しない」「子どもとのすみわけが難しい」などの問題がでてきています。談話室や集会所の中だけでなく、オープンカフェ形式にすると男性が立ち寄りやすくなったり、サロン活動にプログラムを取り入れることで、幅が広がるのではと考えています。

## 4、これからの支援活動

### (1) 仮設談話室の行茶活動の多様化

行茶活動というお茶を出しながらの作務活動では、来る人がだんだん固定化してしまうため、その次を考えることが必要になってきています。そのため、これからの支援活動といたしましては、特に傾聴活動といったことだけではなく、コミュニティ支援ということも視野に入れており、アクリルたわしやミサンガを作りながらお話をするなど、ワークショップを取り入れるということを考えております。

さらに、その完成品を全曹青のWEBページで販売しまして、その収益を仮設住宅の集会場共益費にしたり、自治会費にあてるという活動も考えています。このワークショップはあくまでも人と人をつなぐことに目的がありまして、販売ということではありません。例えば作って配布するとか、現地においてさまざまな形に変えていってもいいかと思っております。

このほかに地域に合わせた活動、例えば読書会や塾など、男性の方にも興味を持ってもらえる活動にできればいいかなと思っております。

### (2) 連携

もう1つ大事と思っているのが、連携や協力です。全曹青のコーディネーターは、現地の行政や社協とできるだけ連携を図っております。行茶活動などの活動報告を必ず行政や社

協に提出させていただいております。活動報告を提出することにより、必要な支援を行政や関係機関に結びつけ、行政が生活支援相談員を派遣する目安にもなっています。

このような関係機関との連携は、復興を目指す上で大変重要であると考えています。地域によっては地味な積み上げが必要なところもありますが、この地域行政や地域福祉団体の協力や連携は、後になって地域活動をする地域団体（寺院）として社会の一部として認識されることにつながると考えています。

また、支援者同士が結びつくというのも大事だと考えておまして、先日、釜石におきまして、行政・社協・地元NPO、支援団体がどのような活動をしていくべきか、お互い知恵を出し合おうということで会議を持つことになり、さまざまな方と意見交換を行うことができました。これにより、仮設住宅での勝手な支援による住民負担を軽減し、また、活動や支援の偏りをなくすことができます。

それぞれの活動を知ることにより、自分たちの活動にも生かすことができますし、行政などの連携により正確な情報を住民に提供することができます。自分たちの団体がヒーローになるのではなく、主体はあくまで住民であることを確認し、支援の力をうまく生かして共助の福祉社会となることを狙っています。共助の福祉力のある地域コミュニティは、復興において、生活の維持において、将来の町において、防災において大きな力になります。今後、このような連絡会が定着することを願っております。

## 5、今後の課題など

### (1) 継続した活動の難しさ(人員・資金)

今後の課題ですが、継続支援ということと、連携をどのようにつけていくかということです。特に仮設住宅のサロン活動などは、定期的な継続した支援でなければなりません。しかしながら、各曹青、全曹青とも継続支援が難しい面があります。また、これからの厳冬期を迎え、メンタル的にも生活にもケアが必要な時期でございますが、支援者の減少も予想されています。曹青のみならず、一般に広くボランティアを募集することも1つの方法ですが、まだ行茶活動を運営できるようなところまで至っていないことも課題となっています。

また、釜石の連携会議ですが、やはりこの会議を持つのは非常に労力を要しました。それぞれ活動されている団体には、自分たちの思いがあります。その思いをつなげるというのはなかなか大変なことですが、支援活動で大切なのは、主体が地域の住民の方がただということです。その地域の方が共助の社会、福祉の社会、地域、街づくりをしていくということが大事になっていくと思います。このことがまた、後々の防災力につながるということもありますし、私も地味ながら取り組んで生きたいと思っております。

### (2) みなし仮設、在宅避難者への支援

次にはみなし仮設、在宅避難者への支援です。みなし仮設とは、自治体が民間住宅を借

り上げて、被災住民に提供している住宅や、雇用促進住宅等の公営住宅を被災住民に提供しているもの、被災者自身が自ら契約した民間の賃貸住宅のことです。自治体が提供する仮設住宅への支援は、わかり易くできますが、みなし仮設、在宅避難者、従来からの支援を必要とする方がたへの支援については、まだ活動に至っていない点が課題となります。最後に今回の震災の対応におきまして、宗門あげての多くの方がたのご協力をいただきまいました。多くのご協力を賜りながら、至らぬ点が多々あり、誠に申し訳なく思います。

しかし曹洞宗、宗門としてまとまると非常に大きな可能性を持っていると思っております。例えば現地で曹洞宗の復興支援本部を設け、曹洞宗の方がたの力を集め、そして、岩手県、宮城県、福島県などにベースキャンプを設けまして、各県宗務所や寺院の活動を体系的にバックアップできていくような体制ができれば、災害に対して宗門の力もさらに効果的になるのではとも思いました。発表は以上となります。失礼をいたしました。

## 発表者② 三浦賢翁師（秋田県大龍寺住職）

### 1、復興支援活動

秋田県災害復興支援本部、大龍寺住職の三浦賢翁です。

3月11日の地震の直後から秋田県は2日間の停電となりました。電話も通じずガソリンも無い中、まずは近所の1人暮らしの方、岩手・宮城・福島に家族や親戚をお持ちの方がたに声をかけて回りました。

電力復旧後、テレビで被害の大きさを知り驚きました。支援物資を届けたい、けれどガソリン不足で身動きがとれない状態でした。そこへ普段から行っている秋田曹青のメンバーリストで、秋田県庁や各市町村役場へ物資を届けると、県の方で被災地に届けてくれると言う情報が入りました。会員各々が檀家さん、商店街、学校、保育園の方がたに声かけし支援物資を募り、まずは県庁、役場へ支援物資を届けました。

3月22日、トラックの往復分の燃料を燃料携行缶で確保し、被災地へ直接向かって物資を届けました。最初に向かったのは陸前高田でした。現地の普門寺さまより情報をいただき活動することができました。

3月31日。まだ寒く入浴もできない状態でしたので、秋田の温泉のお湯を使った足湯を行うことにしました。こちら山田町龍泉寺さま、大槌町吉祥寺さま、現地のご寺院さま方に情報を頂き活動することができました。避難所では「龍泉寺さんのご縁でこちらに参りました」と言うと、「ああ、うちは檀家ですよ」という声が挙がり、会話のきっかけになりました。お寺のネットワークは災害支援で非常に役に立ちました。

瓦礫の撤去には沢山の人数が必要でした。そこで曹青会員とともに、一般のボランティアを募り、ボランティアバスを運行をいたしました。このボランティアバスは第2弾、第



3弾と継続中ですが、瓦礫撤去に始まり、行茶活動、SVAの移動図書館への協力、吉祥寺さまで開催された地元の人を元気づけるイベント「復興食堂」への協力、江岸寺さまでの4ヵ月追悼法要随喜など、さまざまな活動に利用しています。

元秋田曹青会員の長谷寺住職、浅田高明師は石巻で精力的に、足湯・行茶・萬燈会法要などの活動をされていまして、こちらにも協力させていただきました。こちらの足湯にも秋田曹青所有の大きなタンクや機材を使っていたいただきました。

## 2、活動の中で学んだこと

「傾聴」の大切さをあらためて感じました。避難所にいらっしゃった女性の1人は、「人間の一番のおもちゃは、やっぱり人間ね」とおっしゃいました。「人とつながりたい」というお気持ちが伝わりました。

さまざまな支援活動もほとんど「傾聴」の要素を含んでいます。皆さまご存知だと思いますけれども、秋田県は非常に自死率の高い県であります。10年ほど前から、当時の秋田曹青会長袴田俊英師が「祈りの集い」を始められました。これは自死遺族の方にお集まり頂き、追悼法要、法話、そして遺族の方がたのお話を聴く茶話会を行うものです。この集いのために「傾聴」に関する研修も重ねてまいりました。

秋田曹青会員の中には、この活動をきっかけとして自死遺族の傾聴、電話相談、ホスピスなどのボランティアに参加する者が出ています。そうしたことがこの度の行茶活動、支援活動に活かされていると思います。

秋田の自坊で、震災の翌日にご法事を予定されていた檀家さんがいらっしゃいました。中止になると思っていましたが、停電で電話も通じませんので、念のため直接お宅にうかがいました。

すると、ご霊膳もしっかりと作られ待っておられました。このような状況だからこそ、家族、親戚と一緒にいたいとの気持ちになったようで、親戚の方も皆さんお揃いでした。

檀家さんからは「鐘も木魚も、線香も蠟燭もみんな電気いらねもんな（要らない）。おっさん（和尚さん）来てくれて安堵した」という声をいただきました。この言葉に、改めて、電気やガスの無い遠い昔から人びとの苦しみを救ってきた僧侶の意義というものを感じました。

岩手県沿岸部のご寺院さま方は、地元の方がたを支援され、とても頼りにされておりました。男鹿半島の自坊は高台に位置しますが、海が間近に見えます。同様な規模の津波が日本海側に起きたら、間違いなく町は浸水していただろうと思います。その時寺は、僧侶は何ができるのか考えているところです。

いざというときは、何よりも単純が1番だということを実感しました。災害時に活躍したものは、みな簡素なものばかりでした。

身近にあった蠟燭。蠟燭の灯りだけで夜食事がとれます。ストーブは電気を使わない石油ストーブや、薪ストーブ、そうしたものが重宝しました。灯油を汲み上げるポンプも、

電池が品切れでしたので、手動の物が役立ちました。

例えば鉛筆削りも、電動の物もあれば、ハンドルの付いた大きい物もありますけれど、親指大の小さい鉛筆削りで過不足なく使えます。普段からなるべくシンプルな生活を心掛けること、それは省エネ・環境にも良く災害時にも有効だと思います。

支援物資や募金を募る為にいろいろな人に声かけしたんですけど、「支援したい気持ちはあるけれど、一人では何をしたいのかわからなかった、声をかけてくれてありがたかった」という言葉をいただき、かえって喜ばれたということがありました。

足湯のお湯を提供していただいた「鶴の湯」(乳頭温泉郷鶴の湯温泉)さんも、私たちの要望を喜んでおられました。その後自ら大きな檜風呂を製作され、被災地で温泉の提供をされました。支援の輪を広げ、さらに大きな支援の力としていくことも、大切なことであると思います。

被災地の皆さんが見ず知らずの私たちを非常に温かく迎えてくれたことに驚かされました。窓際を知らない人が歩き「こんにちは、コーヒーとお茶菓子を持って来ました。コタツもありますよ、どうか集会所の方へお越してください」と声をかけられたら皆さんどうするでしょうか。普通の住宅地であれば警察に通報されていたかもしれません。しかし現地の方がたは他の人にも声をかけてくれて、皆さんで集まってくださいました。お互いを受け入れ合う、そういう気持ちになっていたのではないのでしょうか。

入れ歯の洗浄剤や入歯安定剤、老眼鏡、女性の生理用品。支援物資は、老若男女、病気や身体に障害のある方それぞれに異なった重要な物があることがわかりました。これは若い男性だけではなかなか気づき難いものでした。

被災地がだいぶ落ち着いて、自衛隊のお風呂で入浴出来るようになってきた頃、私たちが行茶活動に行きました。その時にふと行茶の列が止まったんですね。何かかなと思っていたら資生堂の方が化粧品を配っていたんですね。そこに女性陣、老いも若きも長蛇の列で、貰った後に本当に嬉しそうな顔で、冗談を言いながら帰ってこられたんですね。ああ、化粧品って本当に大切なんだと思いました。後から聞いたんですけども、阪神の震災の時に、田中康夫さんが女性に口紅を配られたとのことです。「女は紅を引くと気持ちが引き立つのよ」とおっしゃる方もいましたが、口紅は小さくとも大きな心の支援になると感じました。

化粧品を抱えた女性陣は「おっさん(和尚さん)明日もまた来てね。明日来たらみんな綺麗になってるから。でも誰だかわかんねかも知れんけど」と、おっしゃいました。

こちらが「鏡が無くて大変ですね」と言うと「いや大丈夫だ、みんな年季入ってるから。ブラインドタッチで大丈夫」と。すごく明るく振舞っている方が沢山いらっしゃいました。こうした苦しい時だからこそ、明るく振舞おうとされているのだと思いました。

ドラム缶の焚き火の周りで「ここは居酒屋『津波』だ」と言いながら一杯やっている人、「避難所に来てから毎日バーベキューだ。停電で冷蔵庫が使えないから生もんから先に食うんだ。何も調理道具も無いし、毎日バーベキューで食ってるんだ」という話をされてお

りました。どこに行っても明るく振舞う方が沢山いらっしゃいました。泣く時は泣き、笑う時は笑う、それは人間の持っている自然な心の治癒力ではないかと思いました。

支援活動では、「弱者を助ける」という意識はまったくありませんでした。被災地の方がたの何か不思議な力に導かれるようにして被災地へ向かっていました。

避難所では小学生も荷物運びをし、古いも若きもそれぞれ、瓦礫の撤去、遺体の搜索、炊き出しなど、自分ができる役割を果たされていました。

行茶活動でコーヒーをお配りしている時は、「みんなに行き渡る様に少しずつでいいよ」という気遣いもありました。苦しい中を生きていく中で、被災者の皆さまはそういった「智慧」を体得されていったのではないかと思います。

被災地に向かう度に大切なことを学ばせていただき、また力を与えてもらいました。

### 3、活動上の問題点

震災直後、支援活動に向かうにも、まずはガソリン不足で身動きが取れない状態でした。そこで軽油で動くディーゼルとにしました。そのトラックも、レンタカーはすべて被災地へ借り出されておりました。そこで会社を経営する友人の2トントラックを借りることにしました。彼の会社は震災で3ヵ月先までの仕事がキャンセルされ、自身も仕事が無い状態だからと、自ら運転手を務めてくれました。

現地では自治体や自衛隊、企業から大型トラックで大量の支援物資が届けられていました。しかし人材も小回りの利く小型車両も不足し、各避難所への配送は滞っている状態でした。そこでこちらの持ってきた物資の種類と量を告げ、それに見合った避難所を紹介していただき、直接物資を届けることにしました。

実際に被災地に行ってみると、必要な支援や物資はその避難所ごとに異なり、また時間によって変化していました。

県や報道の情報にはない支援物資の要望が、かなりありました。「古着で構いません、暖かい服はいくらでも」「ガソリンが手に入らないので自転車があれば」との要望に応え、とんぼ返りして調達してきました。

小回りが利く私たちなので、現地の声とスピードを大切にし、足りないものは補い、余っている物は別の避難所へと、臨機応変に対応しました。

### 4、これからの支援活動

東日本大震災震災物故者の追悼と、被災地の方がたが生きる希望を取り戻せるようにとお祈りする「追悼と復興への祈り」を開催いたします。また、中小企業の経営者と家族の自死防止と再起の支援に取り組まれている団体「蜘蛛の糸」代表の佐藤久男氏とともに被災地で経済的に苦しんでいる方、事業の再開を考えている方の支援を企画しています。

以上で終わります。ありがとうございました。

### 発表者③ 石ヶ森桂山師（岩手県龍泉寺住職）

ご紹介いただきました、岩手県山田町織笠の龍泉寺の住職、石ヶ森桂山と申します。巷では、この度の東日本大震災に被災したことによって壊滅的な被害を受けたことが、爆心地を表す「グラウンドゼロ」と比喻されもしますが、正にそのグラウンドゼロからやってまいりました。前に発表された宮下さんにも三浦さんにもずっとご支援をいただいている、そういう仲でございます。この発表で一緒になったのもすばらしい縁だなと思っております。私はこうした場での発表は不慣れなものですから、勘違いされることの無いように申し上げたいのですが、「俺こんだけやったんだぞ、どうだ」と自慢じみたことを話すつもりはありません。勤めてきたことを時系列的にお話しさせていただきます。

#### 1、復興支援活動の事例報告

その日、私と母は寺におりませんで、内陸の花巻市というところに家内と子どもを迎えに行っている際に、東日本大震災に襲われまして、「お前たち駄目だ、山田町は恐らく10メートルを超える津波が必ず来るから」と、私たちは妻子を残し急ぎ帰途につきました。その日は、釜石で地元の消防団の人たちの炊き出しを手伝いながら、一晚過ごして次の日に帰りました。

##### (1)物資配給支援

その間、1人で寺院を護っていてくれた弟は、被災後直ちに、中学校と高校に状況を確認しに行き、食料、米、菓子など寺にあるものを全部ダンボールに入れて運びました。

##### (2)ご遺体の受け容れ

心配して来てくださった檀家さんとお寺の周りを見て、確認をしていたところ、津波で流されてしまったホトケさん（ご遺体）が各所に皆さん運ばれてきたのですが、そのままでは、ホトケさん（ご遺体）かわいそうで、そのまま置いておくわけにもいかない。「和尚さんのところに相談を」ということになったそうなのです。弟は、住職も同じことをするであろうと、ご遺体を本堂へとお運びしました。砂だらけ水だらけでベタベタという有様でしたので、ビニールシートを敷き、法堂、位牌場、車庫に安置したのです。

私が到着してからは運ばれてきたホトケさん（ご遺体）に対して、地元の消防団と家族の方が一緒にお越しの場合はそこでお焼香をしていただいて、お勤めをして、もう何も出来ないんで、せめて枕経のつもりでご供養しお焼香して、次から次へとご遺体を並べざるを得なかったのです。

##### (3)庫裏での炊き出し

寺では母が1人で炊き出しを行っていました。地元の消防団や来訪した方に、その都度

その都度、配っていました。そのうち消防団には、昼はおにぎりを持たせて、夜帰って来たら、とにかく寒かったですから、薪ストーブの周り、囲炉裏の4隅に蠟燭を灯しながらかたまって、水道も止まっていますし、電気もつかない、そんな状況だったので、小川で手足を洗ってもらい一緒にご飯を食べました。蠟燭の火で炊事をやりました。その様な形での食事の提供、風呂の提供というのを、6月までずっと、一緒に家族みたいになってやってきました。

#### (4) 自死者の報告

被災数日後でありましたが、食事をしに来ていた消防団から自死者の報告を内々に受けました。やっぱり心配していたことが起きたなと思いました。これはちょっと大変だなということで、私たちが回って話しかけたり、話を聞いて差し上げたり、我われが寄り添いながら耳を傾けることの大切さを痛感したわけです。

実際に「この思いを誰にぶつけたら良いか解らない思いだったけど、今日、和尚さんたちに来ていただいて気持ちをぶつけて話を聞いてもらってスッキリしたー」と言われました。

#### (5) 燃料物資の支援を受ける

燃料と物資の枯渇問題があるなか、当時、三重県の同安居、鬼頭宝徳師が、大量のドラム缶にガソリン・灯油・軽油・衣料品など物資を満載して来てくださいました。そのガソリンの調達には、宮下さんのお力添えがあったと聞き、感謝しております。とにかくそで助けられました。地元の消防団がポンプ車だけじゃなくて、被災を免れた自家用の車でも支援活動を行っていたわけですが、そうした車両に燃料を入れられない状況でありました。支援活動だと言っているのに、当時ガソリンスタンドに常駐していた町の職員は、一般車両では駄目だということです。その様な状況でありましたので、支援していただいた燃料を少しずつ皆で分けて、支援活動を行いました。

#### (6) 火葬場の早期通電を打診

水道も電気も携帯電話も何も通じない、全部だめだったんですけれども、そんな中、ご遺体どうすっぺ（どうしたものだろう）、ということになったんですよね。一時期30体という程に増えつつあって、仮安置所になっているけれどもどうすっぺと。それから災害本部に行って、仮安置所であることは構わないが、安置所や検案所が決まっているのならば、早くそちらに搬送してもらわないと困るとお願いしたり、当時私の町でも仮埋葬、仮土葬ということを考えてんです。

だけれども、よく考えて見てください、「みなさん、仮土葬というけれども、ある時期掘り起こして、搬送して、火葬して、ということに携わるとご遺族、関係者、いちいちその人たちのこと考えたことあるかと、大変なことになるんだよ」と。とにかく早く火葬場を動

かしてもらって、ほかの自治体にも頼んで、どんどん火葬を受けてもらって、とにかく火葬してもらいたい、私はそう言ったつもりです。町でも最終的に動いてくれて、やっぱりあの時、火葬頑張った良かったねということになりました。土葬に踏み切ったところの大変さは皆さんおわかりだと思いますけど、あれはよかったなと思いました。

#### (7)火葬場の機動と一霊一霊の供養

とにかく早期の火葬が可能となってからは、とにかく一霊一霊の供養をしようという気持ちでやって来ました。「読経をボランティアで」とよく言われるのですが、「ボランティア」じゃないんですよ。とにかく、とにかく「供養」です。誰も弔う人のいないところで火葬に送り出すのじゃいやだから、弟と2人でやったわけです。その一心だけです。「ボランティア」という言葉で言ってほしくないです。

#### (8)行茶・傾聴活動の開始

そのうちに先の自死等の問題を踏まえて、ガソリンを運んでくれた鬼頭師と相談して、初動の早かった久間泰弘・前全曹青会長に支援を打診しまして、各避難所での行茶・傾聴活動を始めたわけです。

我われが勝手に動いてはいけないんだろうなと感覚的に思い立ち、災対本部（災害対策本部）で副本部長（副町長）や医療班班長（保健福祉課長）に相談したところ、町でも「心のケアチーム」というのを作って、大学病院の専門家たちが入るとのことでした。そこで、当初は、医療班の心のケアチームとともに活動することを促されました。

我われはそれで構わなかったのですが、現場サイドからは、「和尚と一緒に」という躊躇があった模様でした。その後、「大切なことだから和尚さんたちで活動して下さって構わない」とご理解いただき、町の了解のもとでの活動であれば、私たちが有難いということで、ボラセン（ボランティアセンター）が立ち上がるまでの当座は和尚さんたちということで、避難所の資料等も協力して貰い、全曹会長も紹介し、相談調整しながら活動を始めた訳です。

活動した報告は医療班班長（保健福祉課長）に上げ、役に立てて貰うこととしました。ボラセンが立ち上がってからはボラセンに報告、ボラセンがそれを読んで、有意義な情報というのは行政さんのほうに動いてもらいました。

その後、青年会の諸師以外にも鬼頭さんのつながりで4月から同じように傾聴活動のボランティアなんですけれども、一般の方たちが活動されました。心理カウンセラーという資格をもっていた方がたで、今でもずっと必ず毎月入ってくださっています。これは名古屋市のファインカウンセリング研究会というところの、代表は東昭人さんという方です。この方、ご自身も鬱を克服してやってきた経験から、やりたいということなんです。

同じ社協部の「ぬくだまり」というところで、なんとなくわかると思いますが、あったかいところという意味です。何でも気軽にお話できる高齢者のサロン、「よりあいつこ」と

いう誰でも参加できるお茶どころ。社協のほうでもこれを考えて、青年会の方たちも必死になって動いている、ということです。輪になってハンドクリーム塗ってお互いマッサージしたりしているんですが、山口の青年会、熊本の先輩たちも参加してくださいました。

## 2、活動の中で学んだこと

活動の中で学んだことは、情報の速さの大事さということです。宮下さんもお指摘の通りです。行政も被災者、出来ることは文句を言ったりすることではなく、手を取り合うことだと思ふんです。お互いに気付かないことも多々ありますので、気付いたところは遠慮なく、どんどん指摘し、情報を共有し、つながりあっていくべきじゃないかと私も思います。

## 3、活動上の問題点

当初の情報面の孤立、通信網の遮断です。航空自衛隊が来てくれてGPS、大きな衛星アンテナを設置し衛星電話回線をつなげてくださったのですが、壊れて通話が出来ない状態でした。そのため、足を使っての情報収集が手間取ったわけです。大変でした。ガソリンが無いから自転車を使っていましたし、とにかく余裕が無かったです。「あれもやりたい」、「これもやらないと」と。私自身の反省点でした。そんな中で、できるだけ確実な情報収集と、行政との連携というのが大事なんだと思いました。

## 4、これからの支援活動

私自身は、細くていいですから、とにかく長く、今までの支援活動、みんなで寄り添ってつながりあっていこうという、こういう活動を続けていきたいと思ふし、ご支援に入ってくださいている方たちもこういう気持ちでいてくださっているんじゃないかと思ふます。

## 5、今後の課題や要望

仮設住宅の集会所でのさらなる有意義な活動の模索ということです。集会場が普段開放されているのかと思ったらそうじゃなくて鍵がかかっているわけです。そうすると、集会場の意味がないんじゃないかと思ふます。そここのところも、うまくコーディネートしていきたいなと思ふていました。

長期的な支援には金銭面の負担というのは、すごく考えなくてはならないところだろうと思ふます。支援を受けている側、こちらのほうでは現実というのは見えてこないと思ふんですよ。わからないと思ふます。実際に支援してくださっている方たちは大変だろうと思ふます。

今後の課題として、支援してくださる方が容易に安心してそのことに専念できるように宗門としての温かいバックアップ体制をお願いしたいと、この場をお借りして申し上げた

いと思います。我われ一人ひとりも、「してもらって当たり前」という風にならないで、「感謝」と「報恩」と「人の和、輪」は大切にしていきたいと強く思います。

それから大袈裟と思われるかもしれませんが、恐れずに申し上げれば、地球規模、宇宙規模で大変化するであろう今現在だと私は思っています。この後、いつどこでこれ以上のことが起きてもおかしくないと思っています。どちらかといえば、私たちも対岸の火事的な気持ちが、本音のところではあったと思います。お恥ずかしい限りですけど。今回多くの有意善意に出会えたということは大変大きな学びだったと思っています。私だけじゃなくて、みんながそうだったと思います。

我われも復興していきながら、このようなことが起こった場合には、迷わずに他のために行動できるようなところを作って行きたいと思っております。皆さまのお心にただただ感謝をいたしまして発表を終えたいと思います。ありがとうございました。

#### 発表者④ 北村暁秀師（宮城県法山寺住職）

北村と申します。よろしくお願ひいたします。

大きなテーマといたしましては、「被災地の寺院、僧侶のありよう」ということでお話ししたいと思います。これは誰しもがなりうるということです。ただし、私自身はそれが予期せぬものではありました。被災地の寺院、僧侶としてどういうことがあったのか、どんなことをしてきたのか、そんなところを皆さんにお話ししたいと思います。

### 1、復興支援活動の事例報告

#### (1)避難所開設

うちのお寺は高台にあります。幼稚園が併設されていまして、幼稚園の方に、皆さんが津波から追われるようにして登っていらっしやいました。ずぶ濡れでぶるぶる震えながら、それはもう本当にあのときの混乱した状況というのは、絵に表せないようなものでありました。同じようにして大勢の方がお集まりになり、自然に避難所になったという経緯がございます。

#### (2)石巻仏教会として

石巻の仏教会には17カ寺があります。その石巻仏教会としまして、土葬が開始されるということを目にしたときに、誰も押まないで送ってしまっているのか、我われは押ませていただくべきじゃないかということになりました。当然、ご寺院さん自身も被災されている方がたくさんいらっしやいました。動きたくても動けない方がたくさんいらっしやいました。ですから、仏教会とは言いましても、有志です。その有志で土葬の読経をさせていただきます。



### (3) 県青年会

先ほど秋田の報告をお聞きしましたが、内容は非常にかぶる部分もあります。しかしながら、青年会自身も半数くらいは、動くに動けない状況というのがありました。ですので、内陸の方がたが中心になって、活動を展開していただくという経緯があります。

## 2、活動の中で学んだこと

### (1) 避難所として

避難所の活動として特に感じたのは宗教儀礼の必要性（慰霊の法要）でした。

これは、震災から7日の日でした。私自身、恥ずかしながらと申しますか、初七日の供養をしなくてはならないと片隅にはあったんですけども、正直それどころではないと言いますか、あまりに混乱していました。食べ物の手配であったり、医療の手配であったり。そういう混乱の中で、我われサイドからではなく、自衛隊さんから支給されたバナナを、幼稚園の園庭にあるお地蔵さんにそっとお供えされた方がいたんですね。その息子さんが、「何だって、自分で食べなくていいのか？」そしたらそのお婆さんは、「私はいいの。亡くなった人たちにさしあげるの」そういうことがあって、私は、はっと思いました。みんな手を合わせたいんだなと思って、避難所でも定期的に慰霊の法要を勤めさせていただくということがありました。

また、日常的な地域社会とのつながりの必要性も強く感じました。

避難所としては、うちは2ヵ月ほどでありました。その後にも、いろんな支援が来ていただきました。物資をお持ちになられたり、あるいはサービスのなものであったり。いずれにせよ、避難所を閉じた後には、皆さんに周知をしなくてはいけない。人にお集まりいただかないと成り立っていかないわけですね。せっかく来ていただいたり、お持ちになっていただいたりしても。そういったときに、地域の町内会長さん、役員さんなどそういった方がたとの連携が、とても大事だと感じました。今もそれがずっと続いています。

### (2) 仮埋葬時の火葬・東京集団火葬出棺経

次に、仮埋葬時の火葬と東京集団火葬出棺経について、宗教者にしかできないこと（慰霊）という点からお話しします。

石巻ではあまりに人数が多すぎて、やむをえず、土葬、仮埋葬するしかありませんでした。しばらくの間、ずっと足を運ばせていただいたんですけども、救いは、東京から、集団で火葬を受け入れてくれるというようなお話をいただいたことでした。それによりまして、石巻ではさらに1千人くらいの埋葬を出来るような穴をすでに掘っていたんです。でもそれを使わずに済みました。

ただし、実はここにも問題があります。亡くなってからの選択肢として、石巻の場合は3つの選択肢がありました。

1つ目は自費で市外や県外に行って搬送費をかけて火葬なさるということ。これは誰にでも出来るということは決してありませんでした。

もう1つは仮埋葬としての土葬を選ぶこと。ただし、これはあくまでも仮埋葬ということ。決して、葬儀を終えて正式に送り出したわけではありません。ですから当然ご遺族は、土をかけられているだけということで、それだけでも、ものすごいショックがおありだったと思います。

3つ目は東京での集団火葬です。遺体安置所から1日30人とか60人とかという人数を、棺同士が重ならないように枠組みが取り付けられた専用のトラックに載せて出発するんですが、出発するときに私たちは拝ませてくれと言って読経をさせていただきました。ただし、ご遺族側が希望されても原則として立ち会えないんです。また、お骨として東京から帰ってきました、そのお骨を見たときに、本当にこのお骨はうちのお父さんなんだろうか、というのはわからないですよ。それが嫌な方は仮埋葬を選ぶ、集団火葬が始まってからも、仮埋葬を選ぶ方がいらした、そういった実態がありました。

### 3、活動上の問題点

(自坊を)避難所として提供させていただきましたが、この中で特に医療です。うちの近くに幸いにして、内科の先生、産婦人科の先生が、患者さんを連れて避難して来られていました。ですから、この患者さん以外にも、具合が悪くなった人に、ある程度対応してくださったんです。それがものすごく救いでした。皆さんが、これから、いつこういう状態になるかわからない、という前提で今お話しさせていただいてます。例えば地域のお医者さんと、常に普段からこういうことがあったらどうしようとか、話しておくことが、とても大事なことなんじゃないかと思えます。医療行為に関しては、我われはどうしようもないですよ。物ですとか食べ物ですとか、そういったことは何とかあります。医療はとても大事なことだと思いました。

### 4、これからの支援活動

それから、これからの支援活動ということで予定をしていることですが、特に、うちの場合では幼稚園をさせていただいているということがあります。変わっていることといえば、小児鍼というものがありまして、お子さんのストレスを緩和してくれる、疳の虫を緩和するというんでしょうか。私はまったく知らなかったんですけども、関西のほうで非常に有名でありまして、お母さんを一緒にカウンセリングしてくれるんです。震災後に子どもさんが家庭でどういう問題があるんだろうとか、そういうことを引き出しながら、お子さんの治療もなさってくれるということでした。

今後、うちとしましても、とにかく出来る限り、地域の皆さんが集える場ということで夏には同安居や布教師養成所の同僚の方がたのご協力をいただいております。

1月3日には音楽祭ということで、伊豆曹青の方がたのご協力をいただいて萬灯会の供養のような感じで行います。伊豆の方がたが石巻の人たちへのメッセージをカップ燈籠に書いてくださるんですが、それと併せて地元の小学校の生徒の皆さんや幼稚園の子どもたちにもカップ燈籠に絵や願いごとを描いてもらって、それらを灯してその中で音楽を聴きましょうと、亡くなった方がたのお名前もこちらでカップ燈籠に書いて、規模の小さい萬灯会のような企画を予定いたしております。

## 5、今後の課題や要望

これは、これからできることと非常に共通するんですけども、風化をさせないためにという考え方につながってくるのかと思います。私自身もそうだったんですが、何ヵ月か経ってきて、お隣ですけど、秋田県だったり山形県だったり、たまたまお招きいただいて、震災のお話をさせていただくということで、慰霊法要とあわせて法話をするということで、お招きいただいたりしております。各所でそういった動きがあり、当然ですが、離れば離れるほど、伝えないと消えてしまう。

しかも、遠く離れた場所でも、同じ気持ちでいるよという、こうこうしてきたんだよということを経験して地元に戻って檀家さんにお伝えすると、ああそうなんだと、ありがたいね、和尚さんと。私たち自身がつなぎ役となる、そういうこともあるのかなど。ですから、話して伝えるということ、特に現地においてになったことのある宗門の和尚さん方、ぜひまた1つの支援じゃないかなというふうに思っております。

以上、駆け足でありましたけれども、宮城県としてご報告させていただきました。ありがとうございました。

## 発表者⑤ 秋央文師（福島県昌建寺住職）

福島県より参りました秋央文と申します。どうぞ、よろしく願い申し上げます。

私も北村さんと同じように、年齢のせいかな、地元で説教の機会を与えられる立場となりました。また、震災直後に限って言えば、他県に出向いて震災に関するお話をさせていただく機会も増えたような気がします。

そんな折、他県の説教で、ちょっと気になる空気を感じたことがありました。先ほどのように「福島県より参りました……」と自己紹介すると、確かに会場の空気が一瞬変わるような感覚をおぼえたのですね。もちろんすべての会場ではありませんが、確かに「福島」というキーワードに敏感に反応されていた時期があったようにも思います。

要は、放射線被ばくに関する情報が錯綜していたので、福島から来たというだけで何か誤解を与えるような印象を持たれていたのかもしれない。これは、当時の私にとって驚き以外の何物でもありませんでした。

## 1、Fukushima の現況について

震災以前の私は、もちろん地元の福島県に原子力発電所（以下、「原発」と表記）があることは承知していましたが、そこに原発があることの意味についてはまったくの無理解でした。要は、地元で原発があることのリスクについて無関心だった訳ですね。というより、無知に近い状態だったと思います。

地元で原発があるにも関わらず、放射線被ばくに関する知識はゼロに等しい状態でした。また、その危険性についてもまったくもって不勉強でした。ゆえに、法話前の自己紹介の空気を感じて、いま自分が置かれた状況を把握するようになっていったのだと思います。

ですから、今日お話しさせていただく内容というのは、震災以前はまったく原発問題に関して無知であった人間の話としてお聞きください。

### (1) 原発問題のいま

皆さまご存知のように、これまでの発表者の方がたは、地震や津波の被害が中心の話であったかと思います。福島の場合は、それに加えて原発事故の問題があり、限られた時間で私が話せる内容というのは、やはりその原発問題に特化せざるを得ません。つまり、福島の私だからこそ話せる内容について今日はお話するつもりでいます。

とは言え、今の福島の抱える問題は多岐にわたります。今回の私の発表が、福島全体の問題を代弁しているとは決して思いません。しかし、確実に福島のある地域で抱えている問題のひとつであることだけはご理解ください。

今日は限られた時間で一体どのような話をすれば良いのか……正直悩んだ経緯があります。そこで今回は、あるものをこの会場に持参してまいりました（ガイガーカウンターを取り出す）。

これはいわゆる放射線量測定器、ガイガーカウンターと呼ばれるものです。実は被災直後、私が非常に懇意にしている後輩が送ってくれたものです。

震災直後は、ガイガーカウンターを購入することが非常に困難で、その後輩も例外ではありませんでした。とりあえずインターネットで購入できたものを、すぐ手配してくれました。だからという訳ではありませんが、最初に送ってくれたガイガーカウンターはほとんど機能しませんでした。ちょっと精度に問題があったのですね。その後輩には本当に感謝をしておりますが、いかんせん時期が時期ただけに、選ぶ余裕がなかったのも事実です。明らかに放射線量が高い地域に行っても低い数値を示したままでした。

その旨をすぐ後輩に伝えたところ……彼は本当に先輩思いの後輩なのですね、すぐ別なガイガーカウンターを手配してくれました。でも、その2台目のガイガーカウンターも調子が悪く……同じように高線量地域に行っても数値は低いままでした。当時は高性能なガイガーカウンターはとて入手が困難で、予約可能な機種であっても数ヵ月待ちの状態だったと記憶しています。とりあえず、何でも送ってくれるだけで当時はありがたく感じました。

また、その時期は福島県内の宅配業者が機能してなくて、栃木県北部の集配所まで直接取りにうかがいました。送られてくるガイガーカウンターもみな外国製のものばかりで、説明書も英語やロシア語、中には中国語やハングル文字のものもありました。説明書を解読するだけでも、非常に苦勞したことが思い出されます。

しかしながら、福島の実況を慮って、無償でガイガーカウンターを提供してくれる後輩には今でも本当に頭が下がる想いでいます。恐らく、うちのお寺の歴史のなかで、ガイガーカウンターを施物として提供されたのは初めてだと思います。間違いなく最初で最後のお布施となりましょう。本当にこれらの機器を、日々の命綱として持ち歩いているのが今の私の現況と言えます。

それでも、最近の福島が抱える問題というのは、空間放射線による外部被ばくだけではなく、食べ物や水を介して得る内部被ばくの問題です。内部被ばくの問題が報道で取り上げられるようになると、今度はその後輩、何とまた別なガイガーカウンターを手配してくれました。

ちょっと専門的な話になるのですが、放射線というのは $\alpha$ 線、 $\beta$ 線、 $\gamma$ 線、X線など何種類かこの世に存在します。最初に彼が送ってくれたガイガーカウンターでは、数ある放射線の中でも $\gamma$ 線しか計測できないものでした。しかし、今回の原発事故で大気中に放出された放射性物質の中には、人体に最も有害とされるプルトニウムやストロンチウムといった $\alpha$ 線や $\beta$ 線のものがあります。最初に送ってくれたガイガーカウンターではそれらが計測できなかったのもので、その彼はすべての放射線を計測できるタイプのものを手配してくれました。

それを当時は、炊き出しのボランティアなどに携帯して、食材の計測に当てられないかと考えておりました。今であれば、食材の計測には専用の測定器が要ることがすぐわかるのですが、その当時は藁をも掴む思いで頼りにしたかったのだと思います。とにかく、ボランティアを続けるうえで目に見える形の安心が欲しかったのでしょう。また、宗務庁の方からもガイガーカウンターをご提供いただき、今ではその後輩が手配してくれたガイガーカウンターと用途に分けて併用しています。

実は、今日もその持参したガイガーカウンターにこの会場の放射線量が表示されています（ガイガーカウンターに目をやる）。こうやって見ると、東京の数値は本当に羨ましい限りです。当寺周辺のホットスポットに比べたら雲泥の差があります。

例えば、こうやってある数値を設定しておく、その数値を超えた時点で警告音が鳴るようになっています（実際に手動でアラーム音を鳴らしてみる）。この警告音は、決して私の身体から放射性物質が放出されている訳ではありません。もともと震災前からあった自然放射線量に反応しているだけです。これが放射線量の高いホットスポットに行くと、けたたましい警告音が鳴ります。その危険と常に隣り合わせの生活が今の福島の実況とも言えます。

場所によっては音が鳴り止みませんので、携帯電話と同じようにマナーモードに設定し

ておきます。それでもカバンの中でブー・ブー・ブーと振動するので、事情を知らない人には「カバンの中で携帯鳴っていますよ」と言われたりします。正直に事情を話すことも憚る場合は、「後で出ますので」と言って電源を切ることもあります。このように、ある種の綱渡りのような生活を地元では続けているのです。

## (2) 当寺周辺の状況について

ちなみに、お手元のレジュメに福島県の地図を載せておきました。マピオンという会社がインターネット上に公開している地図を転載したものです。一応福島県では、大きく3つの地域に分かれております。いわゆる太平洋側に面する沿岸部の浜通り地方、東北自動車道や東北新幹線が通る中通り地方、それと新潟県境に位置する会津地方です。

当寺は、レジュメの地図で言う中通り地方、ちょうど福島県中央部の南側に位置します。「白河の関」で有名な白河市に隣接する泉崎村というところで、だいたい福島第一原発から南西に約80キロほど離れた場所にあります。約80キロ離れていると言っても、先ほど申し上げましたように空間放射線量は今だに少し多めです。

当寺周辺でどれくらいかという、レジュメにも載せておきましたが、事故から約半年ほど経過して屋内で平均約0.2マイクロシーベルト前後という数値です。

うちには4歳と1歳半の子どもがいるので、妻がいつもよりまめに掃除をすることで室内の除染効果を高めています。放射性物質というのは、塵や埃と同じで吹き溜まりのような場所に溜まる性質があるので、こまめに掃除をすることで室内の除染効果が高まると言われています。その掃除のおかげで、今はレジュメに載せた数値よりも若干低く、約0.15マイクロシーベルトくらいに下がりました。ただし、屋外に関しては平均約0.4マイクロシーベルトと高めの数値が計測されています。

もう少し福島の実況を申し上げますと、それぞれの地域で計測された空間放射線量が、テレビのテロップや自治体の広報から定期的に報告がなされます。ちょうど当寺周辺ですと、会津地方よりも高く、沿岸部の立入禁止区域周辺より低く、同じ中通りの北部や中部より若干低めといった感じです。いきなり数値だけ並べられてもピンとこないと思うので、一応ひとつの目安を提示したいと思います。

ICRP（国際放射線防護委員会）という放射線防護に関する勧告を行う国際機関があります。そこで出している安全基準値の目安が、年間約1ミリシーベルト（1ミリシーベルトは1000マイクロシーベルト）という年間被ばく量です。それが日本の法律でも目安として採用され、1つの安全基準値として社会から認知をされています。もちろん他にも放射線防護に関する国際機関がいくつか存在しますが、一応日本の法律でもそのICRPの理念を尊重している事実に鑑み、今回わかり易い例として紹介させていただきました。

では、当寺の今の環境で1年間生活し続けると、どの程度の被ばく量になるかということを試算してみますと、年間約1.3ミリシーベルト前後という数値が算出されます。これは、単純に1時間の被ばく量に1日の24時間をかけ、かつ1年の365日をかけ合わ

せた数値のもので。もちろん室内で過ごす時間もあれば、屋外で過ごす時間もある訳ですから、あくまでも目安としての数値となります。屋内にいる時の放射線遮蔽率を勘案しても、ICRP が勧告する年間1ミリシーベルトを若干超える数値になるかと思えます。

では、年間被ばく量が1ミリシーベルトを超えたからと言って、即深刻かと言うと決してそうとも言えず、2007年のICRPの勧告によれば、平常時の年間被ばく量は1ミリシーベルトと定めておりますが、緊急時には約20～100ミリシーベルト、緊急事故後の復旧時は1～20ミリシーベルトと幅を設けております。

また、放射線業務従事者（原子力施設で放射線業務に従事する方がたなど）には別な基準が設けられており、安全基準値に関しては専門家の間でも意見が分かれている現実があります。ですから、年間約1～5ミリシーベルトくらいの幅であれば、大人の私たちは許容される範囲内かなと勝手に分析しています。

例えば、ヨーロッパの古い街並みの都市（放射線量が比較的高く検出される鉱山石を利用した石畳や建造物が多い都市）では、当寺周辺と同じくらいの空間放射線量が今でも計測されています。また、南アメリカのとあるリゾート観光地では、ゆうに年間1ミリシーベルトを超える放射線量が計測されています。そのような事実に鑑みれば、極端に不安を抱くほどの数値でもないのかなと考えています。

### (3)子どもに対する被ばく対策

しかし、子どもたちに関しては話は別です。非常に被ばくに対する感受性が強いものですから、単純に大人とは比較できない事情が出てきます。また、外部被ばくのみならず内部被ばくまで考慮すれば、不安は完全に払拭し切れないのが現実です。子どもの感受性で言えば、だいたい大人の3倍から4倍の影響があると言われてるので、かなりの注意を要するだろうとの親の想いがあります。

例えば、外で遊ばせる時には人一倍気を使ったり、こまめに周辺の放射線量を測定して空間線量ハザードマップを作成し、安易にホットスポットに近付かないような指導をしています。また、週末を利用して放射線量の低い地域にドライブに出かけたり、そういう地道な積み重ねをしながら子どもの被ばく量を抑える努力をしています。

また、冒頭申し上げたように、私の今回の発表が福島県全体の声を代弁している訳では決してありません。それぞれの地域で異なった事情を抱えており、空間線量だけ取ってもまだまだ深刻な地域があるのも事実です。また、土壤汚染の問題が指摘されてからは、ひまわりの根が放射性セシウムを吸収しやすいとの指摘がなされると、福島県土をひまわりの花でいっぱい満たそうとするプロジェクトを立ち上げた宗門のご住職もいらっしゃいます。そういう方たちに比べたら、私の地域が抱える不安や悩みはごく僅かなものと言えます。本当にそういう活動を展開される方がたには、心より敬意を表する次第です。

## 2、「人への風評被害」に対する警鐘

さて、今回与えられた時間で、私の口からお話できることは本当に限られておりますが最後に1点だけ私の個人的な想いを述べて総括とさせていただきます。

長い目で見れば、今回の原発問題はいずれ人権問題につながる恐れがあるものと個人的に危惧しております。具体的な事例で申し上げれば、10年後、20年後に顕在化するかもしれない、福島県民に対する「就職差別」もしくは「結婚差別」といった差別事象の惹起です。

実は、それを予見させるような出来事が、震災直後の地元新聞紙によって報道されました。それは、他県に避難した福島県民がホテルの宿泊を拒否されたり、他県のガソリンスタンドで福島ナンバーの車が給油を拒否されたという、一瞬耳を疑うような悲しいニュースでした。

もちろん一部の心ない方がたの少数事例かもしれませんが、しかし、その問題の根底にあるのは、放射線被ばくと福島というキーワードを安易に結び付け、「穢れ」の思想が根底にある排除の論理で本県民を遠ざける、いわゆる差別思想以外の何物でもありません。

誤解を恐れずに申し上げれば、これらは国を上げて自らに反省を課した「ハンセン病差別」、また最近で言えば「HIVキャリア差別」と何ら構図が変わらないような気がします。

### (1)曖昧な「正しさ」による混乱

ただし、個人的に若干同情の余地を残せる部分は、今回の放射線被ばくの問題に関しては、科学的知見をもっても「正しさ」が定義できない点にあることです。それゆえ、従来の人権問題とは若干異なる事情があるものと考えています。

もちろん意図的な事例は別として、情報が錯綜して「わからない」ことに慎重にならざるを得ない時期に、その慎重な人たちを単純に「差別」という切り口のみで批判対象に据えることは、ある意味酷なような気がします。

要は「わからない」ことに対して不安を覚える人に、「差別はいけない」という大義のみを押し付けること自体、時にその「わからない」ことに拍車を掛ける恐れがあるということです。大切なことは、その「わからない」ことに対して、ある種寛容な姿勢を以て臨んでいくことではないでしょうか。それなくして、今回の「人への風評被害」を払拭する術はないものと感じます。

### (2)学校教育現場の迷走

「わからない」ことの象徴的な事例を挙げれば、最近学校教育の現場で校庭利用基準に関する放射線量の議論がありました。震災直後に、国の方から年間20ミリシーベルト目安とする毎時3.8マイクロシーベルトという基準が学校教育の現場にあてはめられようとなりました。しかもそれは、放射線防護の専門家の方がたが名を連ねる政府の諮問機関で



決められた数値です。

そうしたら、当時内閣官房参与の職にあった小佐古敏荘氏から、その国が定めた数値に対して身内の立場から強い批判の声が挙がりました。つまり、学校教育の現場に年間20ミリシーベルト（毎時3.8マイクロシーベルト）という数値は、とても容認できないという姿勢を示されたのです。

結局、侃々諤々（かんかんがくがく）の議論の末、小佐古氏は内閣官房参与の職を辞することになりました。小佐古氏とは放射線安全学の第一人者で、その道の権威と言われる専門家です。その専門家の先生が、国が定めた数値に対して抗議の意を表し、涙の辞任会見まで開いた事実は社会に大きな衝撃を与えました。当時の学校教育の現場、とりわけ子どもを預ける保護者の間でも大きな反響を呼び、確実にこの件をきっかけに国に対する不信感が強まっていったようにも思われます。まさに、小佐古氏の言う「自らのヒューマニズムにかけて、この数値だけは絶対容認できない」という言葉が、我われの「わからない」という不安に拍車を掛けていったのです。

### (3)「わからないこと」への対処

このように、今回の放射線被ばくに関する議論においては、専門家の間でも意見が分かれ、低量被ばくに関する医学的な臨床例もないことから、一体どの数値を信用すれば良いのか「わからない」状態を広く生み出しました。

このような「わからない」ことから来る不安に目を向ければ、その不安におののく方がたに対して、「差別はいけない」という大義のみを持ち出すだけでは問題の解決は図れないものと危惧します。逆に、問題の核心を地下に潜らせてしまうだけの結果を生むのではないのでしょうか。その人びとの潜在意識に潜ってしまう不安の種子こそが、将来の人への風評被害、つまり「就職差別」や「結婚差別」の温床にも化すような気がします。

個人的に思うに、これまで宗門が向き合ってきた人権問題とは、被差別者と差別者、つまり差別される側とする側が明確に是非の基準で分けられ、その対立の構図のもとに差別問題を克服していく手法が取られてきたような気がします。さらに一步踏み込んで発言すれば、差別に加担する側は非という、わかりやすい構図のもと人権学習は進められてきたものと感じます。要は、差別行為や差別者に対する定義が明確でわかり易かったのです。

それが今回の場合に限って言えば、科学者の間でも「正しさ」の定義が分かれるような現状で、その安全基準の曖昧さが、同時に是非の構図の曖昧さをも生み出しているような気がします。つまり、どちらが是でどちらが非といった、対立の構図さえ設定できないような気がするのです。

科学的知見をもっても「わからない」ことに対して、誰しも慎重にならざるを得ない気持ちは十分理解できます。ゆえに、「わからない」ことに関しては、お互い誤解の溝が埋まるまで冷静に議論できる環境作りが大切だと思うのです。

将来の福島県民に対する差別事象を未然に防ぐためにも、「わからない」ことに対しては

お互いが寛容になり、単純に「わからない」こと自体を批判の対象に据えず、その「わからない」ことの原因をお互いが取り除く作業が必要だと考えます。

農作物への風評被害と同じように、私が冒頭指摘をした「就職差別」や「結婚差別」という人への風評被害が、「わからない」人びとのこころの不安から生じる問題であれば、まずはその不安を抱える人びとのこころに寄り添う姿勢が必要となってくるでしょう。

そのためにも、当事者たる我われは他者の「わからない」ことに対して寛容になり、お互いがともに学び続ける環境整備を進める必要があると思います。それが、人への風評被害を未然に防ぐ第一歩になるものと信じて止みません。

どうぞ、今日お集まりの皆さま方も、その「わからない」ゆえに不安を感じる人たちの心に寄り添う行為を通して、被災地以外でもできる形を変えた支援活動にご協力いただければ幸いです。

### 3、さいごに

今回の私の発表は、当事者ゆえに冷静さに欠いた発言も多々あったことと思います。また、異なった意見や賛否があることも承知しています。また、今日の私の見解を正しいものとして一方的に押し付ける気もありません。ただ、福島という被災地に身を置き、実際に現場の状況を目の当たりにして感じたことを率直に申し上げたまでです。

何分私もまだまだ「わからない」ことだらけで、「人への風評被害」を克服していくためには、試行錯誤を繰り返しながら長い時間を要する闘いになることを覚悟しています。

また、各々放射線被ばくに関する知識や情報等を含め、今まで以上に学習を重ねていくことが必然的に求められるようになりましょう。これからも皆さま方の温かいご支援を賜りながら、人への風評被害克服のための精進を自らに課す所存です。今後も忌憚なきご意見やアドバイスを頂戴できれば幸いです。

今日のご清聴いただき、誠にありがとうございました。